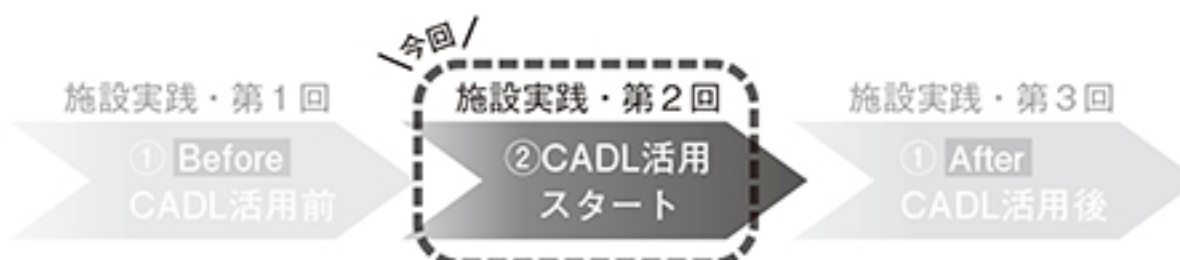


「CADL」がケアマネジメントを変える！

現場実践編

現場でのCADL実践を深める「現場実践編」。
1人の利用者さんの事例をもとに連載3回を1クールとして、
CADLを活用したケアマネジメントの変化を追っていきます。



前回のCADLを学ぶ前のアセスメントでは、「できる・できない」といった機能面の把握に重点が置かれやすく、「生活の意味」や「本人らしさ」を十分に捉えきれていないことについて述べました。今回は、同じ事例をもとに、CADLを学び、「意欲・動機づけシート」を活用した再アセスメントと、「まとめ課題」への展開について紹介していきます。



CADLとは？ 文化的日常生活活動・行為（Cultural activities of daily living）のこと。ICF（国際生活機能分類）に依拠し、参加・活動を含む日常生活で行う本人の「文化的な生活活動・行為及び要素」をいう。「自分らしさ」を尊重した「生きて在ることへの肯定」を、理論的に支えることを目指す。高室しげゆき氏が提唱。

施設実践 第2回

やる気スイッチから導く『まとめ課題』

「やる気スイッチ」を探す

CADLでは、「本人らしさ」と、本人が意欲や楽しさを感じる「やる気スイッチ」を見つけることを重視します。

本事例では、「意欲・動機づけシート」を用いて、「していたこと」「していること」「したいこと」を整理しました。すると、お花や書道が単なる趣味活動ではなく、「自分らしさ」を表現する大切な活動であることが見えてきました。

さらに、「作品を家族や職員に見ても

りたい」「きれいだなと言ってもらいたい」といった思いがあり、人との交流や自己表現、役割感にもつながっていることがわかりました。

また、「外に出て季節を感じたい」という思いもあり、好きだったお花を生けることや書道を通して生活への意欲が広がっている様子がみられました。

意欲・動機づけシートから 見えてきたもの

従来のケアプランでは、「転倒しない」

利用者情報 老人保健施設より特別養護老人ホームに入所。90代前半の女性。要介護4の認定。脳梗塞で左半身まひがある。移動は車椅子を自走し、移乗はつかまり立ちにて可能。食事や整容は概ね自立しており、排泄もトイレで行っているが一部介助を要する。末梢性めまい症の既往があり、体調の変動や便秘傾向がみられる。認知機能は保たれ意思疎通はできるが、表情が乏しく周囲との交流もあまりない。日課のお参りや趣味の園芸は継続している。

「排便コントロールを行う」「身体機能を維持する」といった単体課題が中心となりやすい一方、CADL視点では、「本人はどんな生活を望んでいるのか」「何が生活意欲につながるのか」を中心に据えて整理していきます。本事例では、お花や書道を通して、人と交流する、作品を見てもう、季節を感じる、自分らしさを表現することが、生活意欲につな

がっていると考えられました。

CADL視点で整理した 『まとめ課題』

Aさんの「私の『意欲・動機づけ』シート（掲載用再構築版）」

記入例 ◎：強い思い ○：あり △：少しあり

項目	していた	している	したい
お参り	○	◎	◎
生け花	○	○	◎
書道	○	○	◎
作品を見てもう	○	○	◎
季節を感じる暮らし	○	△	◎
家族との交流	◎	○	◎

お花・書道を中心にした「まとめ課題」

【やる気スイッチ】

- ◎ お花を生けること
- ◎ 書を書くこと
- ◎ 作品を家族や職員に見てもらふこと
- ◎ 『きれいですね』と声をかけられること
- ◎ 季節を感じながら暮らすこと

【CADL視点から見た促進要因】

〈身体的促進要因〉

- ・車椅子自走可能
- ・教室活動参加可能
- ・意思疎通良好
- 〈心理的促進要因〉
- ・作品づくりへの達成感
- ・人に見てもらふ喜び
- ・季節感を大切にしたい思い

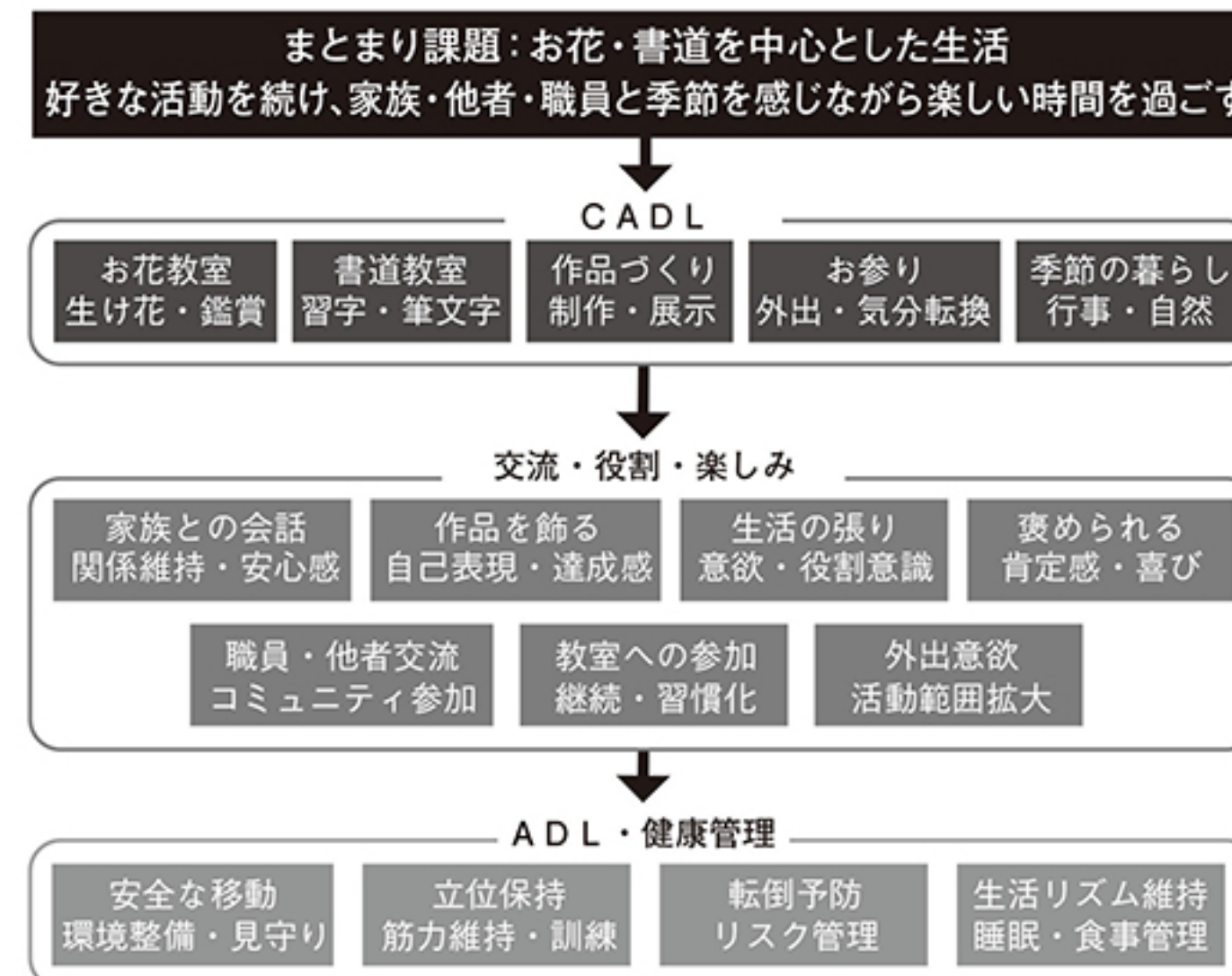
〈環境的促進要因〉

- ・施設内教室活動
- ・家族との交流継続
- ・職員との関係性

「何のために支援するのか」が 明らかになる

CADL視点で重要なのは、「何のために身体機能を維持するのか」という目的を明確にすることです。

図 意欲・動機づけシートを活用して見えた「まとめ課題」*



*まとめ課題：意欲・動機づけシートなどから抽出された複数の課題をひとつにまとめた課題

従来は、「転倒しないこと」が目的となりやすかったと考えられます。しかしCADL視点では、「お花や書道を続けるために安全を支える」という発想へ転換していくことにつながります。つまり、「機能維持」が目的ではなく、「本人が望む生活を続けるための支援」として、ADLや健康管理を位置づけ直していくことができます。その結果、ケアプランは「管理するための計画」から、「本人らしい暮らしを支える計画」へと変化していきます。

前回の「CADLを学ぶ前」のケアプラン1表では、「穏やかに暮らしたい」と多くの人が希望する暮らしの表現がされていましたが、CADL視点での再アセスメントを意欲・動機づけシートを用いることにより、「好きなお花や書道を続けて作品を家族や同じ入所者の方や職員に見てもらい、季節を感じながら楽しい時間を過ごしたい」という「まとめ課題」になっていくことがわかります（図）。

Aさん対話しながら、考えていくことにより、Aさんの望む暮らしの言語化の提案

をすることができるようになります。

今回は、同じ事例をもとにいいよCADLの視点を取り入れることで、ケアプランがどのように変化したのかを説明していきます。

▶意欲動機づけシートはケアタウン総合研究所ウェブサイトよりダウンロードが可能
https://caretown.com/write/dl/bo_kaigoyobou.pdf

ワンポイント

【CADLワード】

CADLでは「本人らしさ」を使う意味

「その人らしさ（客観：周りからのラベル）」は、周囲がその人を識別・定義するときに使います。他者が見て「あの人がいいね」と納得する特徴です。その人の習慣、趣味、思考パターンなど、周囲の「期待」や「認識」が強く反映されています。一方、「本人らしさ」は、その人がその人らしく振舞っているかを利用者本位の立場で評価するときに使います。そのためCADLでは、「本人らしさ」を用いるのです。

▶施設実践・第3回に続きます。



奥田亜由子 <https://caretown.com/>

ケアタウン総合研究所 代表 日本ケアマネジメント学会 理事
主任介護支援専門員、認定ケアマネジャー、社会福祉士
長年、現場のソーシャルワークやケアマネジメントに従事。愛知県介護支援専門員協会理事等を歴任し、ケアマネジャーの育成・指導に携わる。CADLの提唱者である高室成幸氏と共に、CADL普及推進委員会として「CADLハンドブック 第1集：CADLと「らしさ」～本人支援の「新しい視点」(環境新聞社)」を発行。著書はほかに、「目標指向型」介護予防ケアプラン記載事例集」(共著・日経出版)など多数。